

# 看護分野ビデオ目録の企画・試作を行って

石川道子<sup>\*1</sup>，大町典子<sup>\*2</sup>，江藤夏子<sup>\*3</sup>

\*1 日本医科大学千葉看護専門学校図書室，\*2 日本医科大学中央図書館，

\*3 日本看護協会看護教育・研究センター図書館

**背景と目的：**日本看護図書館協会研修グループマルチメディア研究会（2004年3月終了）は2000年、看護図書館の非印刷資料の所蔵および利用調査を行い、看護教育機関でのビデオ所蔵・利用状況から2002年日本看護図書館協会会員の協力を得て「看護ビデオ目録」を試作した。さらに、2003年にこの「目録」の評価として、協会会員へのアンケート調査 - 「看護ビデオ目録」とその展開について - を行った。このアンケート結果を分析する。

**方法：**1) 2003年のアンケート集計結果の分析（調査対象147館、回答数60館、回答率41%）。2) 2002年に試作した「看護ビデオ目録」データ項目記載状況の分析（データ提供館39館、データ総数1,638件、データ項目数17項目）。

**結果：**<視聴覚資料の収集>ビデオ資料を所蔵している館は92%。専門分野の費目・予算配分を数値表記できる館は33%。選定時に、製作/販売情報を教員から入手している館は73%だった。<目録評価>書誌項目は設定した17項目中、全館記載があったのはタイトルと著者表示の一部のみで、記載項目にはばらつきがある（図1）。実際の活用方法は、選定資料の利用が13%、目録データ修正資料としての利用が38%だった。<有用性>70%が改訂・継続を希望した。

**考察：**会員のアンケート集計結果から看護図書館におけるビデオ資料がまだ生きた資料として活用されている状況がうかがえる。しかし、ビデオ資料の図書館での位置付けは、曖昧で、CD-ROMやDVDの位置付けも曖昧なままにされる恐れがある。ビデオの販売情報収集に関して、図書館の積極性がたりないことが分る。

今回当研究会が試作したデータベースは図書館が作成する所在目録であり、相互貸借を目的とした総合目録データベースではない。この所在目録は、ビデオの流通機関と利用者・看護教員との接点をつなぐ役割を果たす。その目録に質と有用性をもたせることは、図書館員の役割である。各図書館・図書室が個別では手のおよばない資料情報の充実を計るには、図書館間の相互協力システムとして「データバンク」を立ち上げることが方策として考えられる。

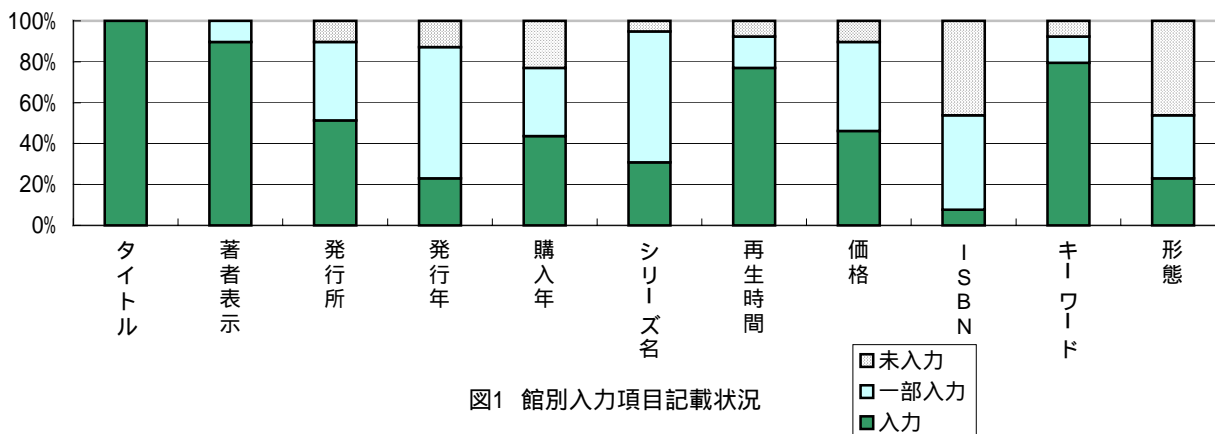


図1 館別入力項目記載状況